●シリーズ●わがまちの文化財〈7〉

町無形　両化八幡神社の夕顔切り

昭和46年2月16日指定

小国両化八幡神社に伝わる祭事である夕顔切りは、祭事の多くが豊穣への感謝や神の恩恵を受けるための祈願であるのに対し、戦勝祈願に対する満願奉納が始まりとされ、県内でも例を見ない奇祭といわれています

伝統行事として夕顔切りと合わせて行われている曳々応行事は、式役から太刀をあずかり、勝ちどきを挙げるもので、戦勝祈願が祭事のはじまりとされる伝承と符号しています。

その後に行われる夕顔切りは、「夕顔面」と呼ばれる面をつけた人が、夕顔（冬瓜）と竹串4本を持ち込み、式席で夕顔に竹串を動物の足に見立てて差し、その後木製の包丁で切り放つ内容で、両化八幡神社の名前の由来となったとされるヒヒ退治がモチーフかと思われます。

その後、中世の「名」に由来すると考えられる、「花角力」と呼ばれる4組の相撲がとり行われ、伝統行事の終了となります。

この祭事は、毎年10月の第3日曜日に行われるのが慣例となっています。

●シリーズ●わがまちの文化財〈8〉

県重文　丸小山経塚出土品

平成22年4月19日指定

賀茂の丸小山から出土したこの経筒は、高さ10㎝、径5㎝の小さなものですが、金銅製で、中に十一面観音像を安置した木製厨子が入っています。

筒には、天文4年（一五三五年）の銘のほか、納経した人の出身地や名前などが刻まれているほか、六十六部聖と廻国納経に由来するものであることがわかる文字が刻まれています。このような廻国納経による経筒は、現在中国地方では山口県で3例確認されているほか、広島県ではこの丸小山経筒1例のみです。

経筒の蓋には、かたばみに似た花と蔦模様が浮き彫りにされており、魚々子地（ななこじ）と呼ばれる地模様が施されていますが、廻国経筒にこのような模様が施されているものはほとんど見当たりません。経筒が発見された場所には土盛りと石造品が安置されていたといわれており、この経筒が出土した付近には、納経所があったと考えられます。

※六十六部聖と廻国納経とは、法華経を六十六部書写し、これを六十六箇国に一部ずつ納めて歩くという修行の一つ。またはその修行者のこと。